乳ぶさを握るわらべの、花にゑみ月にむかひて指ざすこそ、天性のまことにはあらめかし。いやしくも智惠といふもの出て、そのあしたをまち、其夕をたのしとするより、僞のはしとはなれるなるべし。予は寛文元年かのとのうし、梅さくらのにほひもきのふのまがきにこぼれ、やゝ卯の花の白髪見するみつがひとつのあした、有明の岡、ゐな野細江のほとり、糸海（イタミ）といふ所に胞衣をときぬ。こゝはいにしへより連誹のすき人おほく、おのづから耳に心にうつりて、八ツになりけるとし

こひ〳〵といへどほたるがとんでゆく

これを我わざこと歌のはじめとして、より〳〵句をいふ事數あり。十三歳の頃、松江の翁をまねきて、流をくまんといふより、明暮此道に心をつくしぬ。そのころ、又世にゝほへる梅の翁をはじめ、名たゝる誹師や、雲の扉をたゝきて來れる時〻、座をならべずといふ事なし。寛文八つちのとのさるのとしより、花月に心を馴るゝこと、凡

六十年に及べり。猶此のち天數のかぎりしらるゝ夕までなるべし。これそもいかなる因緣ぞや。夫誹諧の道に入る事、初心をはなれて上手にいたり、上手をはなるゝ所名人ならむ。上手とは、句をおもしろく作るをいふ。名人とは、さのみおもしろき聞えもなうて、底ふかく匂ひあるをいへり。猶そのおくにいたりては、色もなく香もなきをこそ得たる所とはいふなるべし。抑十七歳のむかしより、人にかはりて梓にちりばめたる誹諧の書あり、獨吟の書あり、としぐゝいひすてたる發句あり。又序や、跋や、詞書や、つゞまやかにしるし置て子孫にながくのこさんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て、享保十二ひのとの未のとし、さくらをかざす窓のもとに筆をおきぬ。

なゝぐるま全部百三拾餘丁ありて翁の自撰なり。往年揚芳堂これを得て、荒木氏と梓行せんとしていまだ果さず。其本荒木氏に藏して、已に二紀に及べり。先年京人本集より抄して句選を刻すといへども、本集は翁の得意にてものせられぬれば抄せん事其ほいにあらざるべし。余が此集梓行の志をおこせし事は、我が祖父なるもの、只川と號して、翁も親弟なるよしをしるされ、其句など其頃の集物にも散見し、又あつう翁を信ぜられし事は、亡父つねゝかたりきこえしをもて也。ことし某氏に托し、句選に出せるを除き、文部をわかち、或は句選に詞書をもらし、贈答を略せるは重出し、校正ををきめて、荒木氏とはかり世に公にす。冀くは、京本とならべて舊觀に復すといふべし。是や家業をうけつぎ、主願のたまものゝ餘慶もて、おほぢが師恩をむくふにぞありける。

天明三年癸卯春

大阪興文堂書坊　高橋德恒謹識

なゝかるる万老の一

春部

歳旦

春立や星の中から松の色

和州郡山に年をむかへて

いたゞくや大和正月三笠山

初日影まづ出たりないこまやま

大ふくや淡路も見さい茶臼山

猪名野の古郷に春をむかへて

事はじめいくやねなのゝしらうつぼ

さかづきや先打わらふはなのはる

門松やうしろにわらふ武庫の山

火の數やとし徳棚のにぎやかさ

□年の鏡をかほの花にせう

春立や誰も人よりさきへ起き

鳥のこゑ雨あら玉の年立かへる

かをるより雪氣はげしき今朝の空

四十五になりける元日

花といはさ老の五のかふりほろ

雲包む初日を空のをしむやは

雲横に去年のことしの花や空

嘉儀ゆよやをら初日の梅ごゝろ

いねあげよ明て秋の田かゝる世に

此年元日の雪を

降からに鶴を着そむるあしたかな

高砂や去年を捨つゝ初むかし

日よ月よ千代の轍の初ぐるま

祇園の社にまゐりて

あはれげもいにて春たつ朝ちどり

江戸にて大とし の夜、いさゝ

かの神の道を受つたへて

あなたのし十種はじめに日の鏡

江戸より歸京のとし

朝紅や水うつくしき初がすみ

ひもといた年の冠のもゝちどり

初風や去年の目さますいねの花

龜の背に海老ほのあかし初日山

梅の湯のすはや明たつ額休み

梅の湯のすき人ならば花も見ん

このみのたねをわりてすつるな

梅や紅人のけはひの初かゞみ

○已上歳旦巳下本集の列のまゝにうつせり。但し句選に出たるはのぞけり。

殘る火燵まだ山里はこたつかな

如月十日鐵卵懐舊誹諧百韵

興行

うたてやなさくらを見れば咲にけり

月の朧は物たらぬ色　才麿

盃の跡も春なるゆふべにて　來山

此連中は鬼貫・才麿・來山・補天

虚・西鶴・万海・執筆七吟なり。

上巳

節句明てはまぐり煮出す障子哉

子をたづぬる母の網もて花すくふを、かきたる繪に讃せよといふ。即時

蔦からす蛙が母も水かゞみ

はじめて和州郡山のきさらぎを、むかへて

君が地の花のつぼみを見初けり

はいかい雜波順禮の一番に

喰ておいきやくていかしませ五加木食

百韵獨吟

聞は誰みねのあらしや雉子の聲

明石の人まろ塚の松の木もて造りし文臺硯箱を、宵人が家に求得たるよろこびに

誹諧興行

松の木と名はしりながら呼子鳥

月あかき夜、圓通法師にあひて

こぶりこや木摩の里行餅ぶくろ

正月十五日

小雨降るとへども例の火影かな

居所をうつりかへて

うちはれて障子も白し初日影

井戸堀てまづうつろふや松のはな

ひさしく音信ざりける人のもとに、何となく物語しけるに、そこらまばらなりければ

うぐひすに内藏寮てなんといふ

兵部の大輔光成のもとより、文の内にさくらの花を入ておくられしにかへし、

「九重の狀より花のこぼれけりこなたよりも花をつゝみて、

その紙のはしに

君見よやねなかの花の黑き事

うぐひすの青き音を鳴こすゑかな

雜百韻、獨居の僧の庵に行て

「燃る火に灰うちきせて念佛かな

垣のほとりに人のうつぶくしらぬ木の鳥の葵よりはえ出て

下略。右句選には冬部に入たり。今本集にしたがつてこゝに出せり。但し本集一本には冬に入れり。

狀みれば江戸も降けり春の雨

苗代や隱居へ行て手をつかへ

正月十五日亡子が一回忌に

去年より物一時もわすられぬ

二月廿五日惟然にとはれて、廿八日京へかへらんといふ時

止られぬ又きさしませ花ちらば

やよひ二十五日長谷川立賢夢想に、

以二一枝一得二一根一者ハ大欲也

と文字までおぼえたりと、物がたりありけるをことほぎて

芽を出すや心をたねに無根草

春の野に蹲踞（ツクバフ）て居るわかなつむ

角菱の餅にありとも桃の花

宇治に來て屏風に似たる茶つみ哉

はるさめの物の相手をはなれうよ

彌生朔日老母と大久保道古を
いざなひて、高臺寺へ行ける
に、道古發句所望

松杉に〻ほひがあろ歟頃もころ

上巳

こゝろふとや都の雛に夫婦づれ

玉腕子は惠林大德のたまはりける名となん。それのみならず、あまたの禪師詩をおくり、文をよせられて譽ある筆工なり。元祿みづのとのひつじ卯の花月のはじめ、其隣に居をうつして、やがて心おかぬ程になりければ、發句してくれよかしといひしほどに

月も雪も何か殘ふ花も筆に

牡丹　江戸止水所望

あくたにも散氣はなれてまあ廿日

うつふし染といふ書をして、西吟がはいかいの板行やみなんとて、發句望しほどに

それをだにそなたも春ををしますや

正月廿日高森其慎の許へまねかれて、同氏正因一座しける
に發句所望

老せじと來初たに日も遲かれな

きさらぎ五日大佛のほとりに、高森正因が許にまねかれけるに、をりふし雨ふりあがりて、空のけしきいまだ晴さりけるに、庭のかたへなる梅の花白く匂ひ、床につらゆきの像をかけて、發句所望ありける即興

雨雲の梅を星とも畫ながら

おなじく廿五日北野の御神へ奉納すとて、柳水所望

梅をしる心もおのれ鼻もおのれ

彌生九日醍醐の御門主へめされける時、御所望

樹の奥に瀧も音して花や咲

河内國の人八虹があつめし土師の梅の卷頭、來山取次

そのそこにおのれを梅に烏とは

三の里といふ題にて

梅の花目にもたまらで網引か

籬といふ題に

行春の夜を寐ぬ顏の籬から

座神京へまゐりて古郷へかへる日

去年からの此花の頃又いつか

符野紫信が勇士に梅をかきたる繪に

うぐひすよいつをむかしの雪のこゑ

生蓮寺にまねかれて

十かへりのこゑやたえせん松の花

彌生四日はじめて逢ける人に

膝合す雛の脊中をはじめかな

けふの日を柳にやりて川端に

我寸亭にまねかれし時、春日の題にて所望

しら髮うき今朝の昔の春日かな

賴朝の文もたる人に逢て、言葉の便よく見まほしき事を乞

ければ、心とけたりけるよろこびに

幾春の文のよはひや鶴が岡
我ひとりむれつゝ花の旅がらす
としひとつ又もかさねつ梅の花

伊丹より年々東武に通ひける人、ことし花のつぼめる頃、我をたづねて京に來りけるほどに、久しく過しむかしをもかたりなんと、引とゞめて

武士の數こそなけれ花ぐるま

新宅のよろこびに誹諧興行

先え方みの幸(サチ)よろしいなり山
來山が男子まうけたるよろこびを、しらせこしけるほどに、いひつかはし侍る。

初聲を鶴ともきかめ松のはな

春のうち吾妻のかたにくだりなんやといふを聞て、溪鶯子がもとより、むまのはなむけすとて、唐扇に發句をそへておくりけるまゝに、ふたゝびを

からねば脇句をつくりて、よろこびを述ぬ。

いちよい日未廣御覽春の富士　溪鶯
人の詞の花をはな笠　鬼貫

三日桃賀のもとにて、よろこべる事のありけるものがたりなど聞て

芽柳の奥たのもしき風情かな
すつと立木草の中に松の花

伊勢の涼兎、きさらぎの末京にのぼりて、是より北國行脚おもひ立侍るといひし程に餞別

蛙鳴この夜忘るな旅まくら

三月九日桃賀宅にて即興

折よしと花もほゝゑむ軒端かな

人麿影供に

白雲は幾代の花の歌ぶくろ

戀獨吟

生て聞さむればひとり春の雨

初春　石町旅宿にて上野のかねを聞て

遠う來る鐘のあゆみや春霞
春草のすがた持たるすそ野かな

六十賀に、龜は万年の友といふ題にて

幾春を龜の六つよりとしの友

はじめて孫をまうけたるよろこびにまねかれし時、所望に

鶴龜のあゆみ程よき春日かな
日うつりや花にむせたるよしの山

曉梅

鳫啼て夜のつるべにむめのはな

大舜の繪に

賃とらで象も田をかへす勳かな

大坂愛宕の水奉納の繪馬所望に

うかるゝや扇隣に水の花

箔をもて雲をかきたる、ふるき源氏の繪に

花の香やむかしの袖に源氏雲

京の九門がもとより、よひのとし樫木の杖をおくりしに

かしの木や花の初枝百ちどり

小町の繪に

あちらむけうしろもゆかし花の色

半面を見せたる小町の繪に

かたがほや見ぬ奥山のはなの色

七十賀に

つく杖のしちくにあゆめもゝ千鳥

切經堂の繪馬に

梅が香や衆生にみちて軒の聲

八十賀に

さくら咲遠山見こせ眉の八

松に鷹をかきたる繪に

玉爪の金をつかむ春日かな

月次の誹諧せまほしとて、初會の發句所望に

墨に雲人の言葉の初ざくら

妻の一周忌いとなむ人の發句乞けるほどに

くりことの便りに蒔やさくら麻

古歌に、さくら麻の苧生のしたくさしげれたゞあかでわかれし妻の名なれば、櫻麻は夏なり。

蒔は春也。さくらの時分に種まくをいへり。其外麻の花・麻手・麻の蕊等みな夏也。連に如ゝ此。

伊丹鶴阜の吟

ひよ鳥や世のさへづりも石の花

こかしの梅かきたる繪に

笠に杖面影さがすんめの花

西行「とめこかし梅さかりなる我宿を うときも人はをりにこそよれ

佐川流筠兩吟せまほしきとて、發句所望に

鳥の巣に去年の色出す花の聲

富士のすそ野に櫻の花と、田子のうらに舟かきたる繪に、讃望れて

雲やにほふ海もさくらも富士の枝

ある人の老母八十賀に、發句所望せられて

口紅の初花ゆかし玉椿

野に馬ひとつかきたる繪に

鞍の上に人もおぼえずさくら時

閑立和尚、牲川充眞に馬の繪をかゝせて、予に讃を望まれし程に書て遣しける。

婆婆の荷と何月花もはなれ馬

英一蝶が書たるほていの繪に

口ほどけにこゝ草の花ぶくろ

正月十一日佐川流筠兩吟所望の時即興

七夕に契りおきてし初ざくら

同十六日或人の老母九十賀に

世の花や百の峠も九十から

同廿日の夜芳室宅へ行て

雨水くむ筆の林に鳳の雛

あさみに蛙かきたる繪に、讃望まれて

ひとつ着て出ぬも悔しき春日かな

下野國那須の住人大金隨有、みづからのかたちをうつし、文して予が讃を望めるに

面影はしらぬ翁の花香哉

高砂・住の江のめでたきためしを、うつし蒔たるさかづき

に

のめやうたへ神の連理の若緑

落日の魚に袖なし花衣

うた三味線をわざにせし女に

春雨の底をさがすや聲の糸

神祇の春の發句所望に

花垣や雲も和光の八重さくら

只川は我門を叩く事久し。

何もかもしらぬ顔せよ呼子鳥

立圃のかきけるふたりの翁を、いとけなき童のうつくしくうつしたるに、予がこゝろばせを書と聞えしほどに

此人のうつはもの、方圓自在に輝なん。猶百とせの後をことぶき侍りて

月花や鶴の白髪もみかゞみ

山鳥やさくらをしほる夜の雨

備後國府中の住人龜川氏鬼冬、牡丹花の作れるかたちをうつしたる文臺に

かいほこれ今をむかしのふかみ草

右文臺寸法、竪壹尺九寸、横壹尺壹寸、足ノ高サ三寸壹分、金物打、ケヤキヌグと板、裏黑ヌリ

○此句本集夏部にも出たり。ふかみ草初夏なるべけれど、今ここに出して下を略せり。

花桶と名をよびたる竹に、發句書附よと望まれて

花桶や千代の名立の初冠

正月七日雲雅と北野不動の茶店に遊びけるに、はや入相のおとづれ、まうづる人もすくなくなりけるに、發句せよといひければ、とりあへず

またむ月入相のかねに人ぞ散

山櫻のさかりなる枝に、猿の二三疋烏帽子着て幣持たるに、瀧のいさぎよくおちて、其ほとりに離れ馬をふたつ三ツ書たる繪に、讃のぞまれて

しらいとやいなおほせ鳥よぶこ鳥

咲花やとしの下手なる遲ざくら

附誹諧平外(懐)録　四季並歌

岸陰やけふは汐干の淡路山

京にのぼりて

水無月や伏見の川の水の音

宇治川や朝霧立てふし見山

枯芦や難波入江のさゞら波

七車さの二

夏部

鶏が塒もあやめふきにけり

かんこ鳥のこゑに脉見る山路かな

さくら堀の西吟へ、おとづれて歸るさに

夕ぐれは鮎の腹見る川瀬かな

春はなく夏の蛙は吠にけり

梵天瓜を

白くても白き味なし眞桑瓜

神まつり大和子供や立田歌

瓢簞の花とおぼえつ麥ぼこり

芝柏東武に行を

田草取に日和聞顔見るやうな

天滿祭を拜みて

菅原やみこし太鼓の夜の音

夢想

京の町で龍がのぼるやほとゝぎす

瀧の糸はなんの香もなし夏衣

彌生六日蘭舟亭にて

松や竹みどりの中に木瓜つゝじ

坂上宵閣堂にて小倉色紙を乞て見たるに、發句を又乞かやされて即時

秋もはや小倉色紙の隣まで

その夜風呂に入し時、又所望せしを

風呂ふけや蚋にさゝれし所をば

仲夏の頃、京に住ける日野屋何がしといへる兩替屋に行ける日、發句望まれて即時

さみだれに金はしめらぬ手わざ哉

須磨にやすらひて

夕立や卒都婆のよめる烏の糞

嵐にも崩れぬものや雲の峯

巳夫にえぼし着せて

夏草のひとり花やれ水鏡

山下正榮誹名あらたまりたう思へるを、我に文字定よといひ侍りける程に、其勢になれといへば、發句してくれよと乞ける時即時

水に其勢でこそ夏の花

誹諧の道をしへよと、小桂がいひし時

青梅に顔をしかめぬ味をしれ

五月十四日金毛が家に日を待例有て、青水・輙士・之白・百丸各うちかたらひて行けるに、こよひのもてなしにとて、狩野元信が書たる人麻呂の像を床にかけて誹諧興行有ける。予に發句せよと乞けるほどに即時

明やすの此ほのぐ〳〵や烏帽子顔

五月廿八日雨ふらざりければ

年ふれば虎もなみだや忘れ草

水無月廿五日讃州の人におくる餞別

とぶほたる國へいんだら雲の上

孝玄にはじめて逢て

夏衣きたら〳〵もかねぐ〳〵ぞ

九十二にて身まかりけるにおくる。

九十一も二もなしそれも夏衣

妻におくれしを悼ておくる。

よもさぞな明やすいとは僞と

美濃國加納に行ける時

お多賀への道もおいその夏木立

はん女の住けるあとゝて、人のをしへけるに

秋も來ぬ其人の閨の草まくら

青野が原を通りて

盜人の塚もむさるゝ夏の草

加納にしばらくありける時、野ゝ山内匠にまねかれしに

たのもしや何も加納の青田時

中村氏端山が許にてしばらくやどりけるに、心ざしのあさからねば、歸るさの名殘に

まつとならばいなば又こん秋もやがて

六月の時鳥といふ題にて、發句所望卽時

笋は穗に出る雲のはつねかな

金毛亭にて橘といふ題を出して、發句所望の時

雨ぞ降る寐て橘の起てもぞ

廿八日の雨を

とらが袖そこに有やら降泪

一心院常念佛

あら涼し鉦の音死ぬ一心院

靈山にて

雲水や庭行水に落かゝる

大坂に住ける錫太といひしもの、妻を失ひてのち京にのぼりて、我に發句してくれよかし、石塔に彫附て手向たう侍ると、願しをあはれに覺えて

たちばなは其日〳〵をむかし哉

五月五日はじめて、大野の城下に入て

夏草に馴染初たる大野かな

已夫が近き隣に住て久しく音信ざりける事を、句に聞えとし彌生の晦日はきのふになり、けふ手に落ければ返し

夏が來た隣へだつも霞だけ

岸野次郎三郎は三筋の糸にほこりて、普く世に其名をしられぬ。夏もまたきのふけふなりける日、初てかれが一曲に耳をよせて

卯の花の糸に先よる初音哉

長風興行

若竹にふしなき中のむすびかな

光彦が有馬の湯より出たるに贈る。

五月雨を跡に置つゝ有馬菅

淡水が新宅にて誹諧興行

花や咲筆に机に雲見草

祇園の御輿洗に

鳳凰のいくたびぬるゝ名殘かな

しれる女の尼の願ありとて、北野の西方寺に籠りけるを、望にまかせやるとて、卯の花月三日かの寺にゆきて

我はまだ浮世をぬがで更衣

忍證上人の所望にて獅子谷眺望

麥の穗も赤らむものを法の聲

しれる人のもとへ、今宮祭りに行て

けふとに枇杷も鈴ふるいさめ哉

五月十三日蟻道身まかりけると聞て、十九日におくる。

竹の穗はむかしの馬の夢路哉

眞葛が原にて座神興行

あら涼し身はのら猫の床めづら

花をしむけも夏山の柴車

五月十日月漉興行

下に居ぬ人のこゝろや雲見草

不二

夜を殘す痕ざめや夏の雪颪

夫木

夜を殘すねざめに聞ぞあはれなる
夏野の鹿もかくやなくらむ

西行

ほたるの卷を書たる繪に讃

物いはぬほたるや袖のたはれ草

橘の島といふ有ける。香ばしき國の人、美島はじめて我宿に飛來て、花橘といふ俳諧の書をおもひ立ける程に、橘の發句してくれよと乞ける程に、けふより幾久しくちなみ結ばんとの悦びを述ぬ。

橘よ今をむかしのこゝろ種

笠をいたゞき杖を携へて、富士見んと立出たる雲鼓法師がすがた、風になびくと詠じけん昔におもひよせて、殊勝に侍りければ、一句をおくりぬ。

風になびくけぶりも夏の雪見哉

卯月の末、安藤賴母殿に行て

葉さくらに心ゆかしや鞍あぶみ

題黃香 二句

床まくら父に骨折あふぎかな

日に耳にあふがぬ風のかをり哉

今宮まつりに、桃賀亭へまね
かれて卽時

いさましや人の顏照る神祭

願事有ける人のもとへ、廿六夜待にまねかれて所望に

待かひや夜の埒もはや明やすき

北野にまゐりて

むすび葉に心こめたる宮居かな

人の子が身まかりけるを悼て贈る。

あぢきなやひろげぬ文に飛ほたる

輕人がつくしに旅立けるむまのはなむけ

海山やみやこの筆に雲見草

同素山におくる。

青梅のつくしにいさむ旅出かな

端午

露に雲蓬つむ野の朝かゞみ

雲水やいしな礫の端五つ

しなの〻國諏訪の湖をよめる古歌に
「うなゐごが氷の上を打ならす
石な礫のころ〳〵の里」

望海庵老和尙所望

またもこんこずゑの海を夏の花

卯月の末三人を書たる繪に讃

所望

ほと〻ぎす馬追船頭おちの人

禰宜の傘さして、片手に燈を提て行ける繪に 雜

雨雲の影神〳〵し傘の下

呑流といひし人、同江のほとりに住て、花匂ひ月さやかなる時〳〵おとづる〻事も近かりけるを、ことし水無月の初、居所遠くうつし行ける新宅のとぶきにおくる。

花と實の中垣涼し梨子の窓

一禮一周忌

足跡のなきを首途に夏の霜

小蝶草に水鶏をかきたる繪に

香盤の烟もあつき庵かな

杉の村立にほとゝぎす書たる繪に

鳴ちらせ杉のあらしに聲の花

馬貞といひし人、つくしへ出立けるに餞別

ふところに花こそにほへ夏の雲

老ては子に從ふ。

むぎわらは麥掃庭のはゝきかな

是は予が句のよし、先年京にて流布ありしと或人物語有ける。されど控書になき故とゞめ置也。

子におくれ給へる人に、夜の鶴のねざめおもひやりて一句をおくる。

くちなしにはなうちかみて窓の花

西行の夏野の鹿の鳴音を、今東行子に離れたる寂寞におもひよりて

夜をのこす袖にまくらに夏の露

末社の神をかきたる繪に

しら鳥のこゑに尾のある田植かな

凌霄や杖に老嚙む嫁が門

凌霄や蟬の團扇に日の相撲

田家行水

てゝら脱帶跡白し日南水

結髮や鏡はなれて朝すゞみ

夕立やむしろまとひの都麥

麥つきやむしろまとひの俄雨

此句いづれに可定哉、先書付置。西行歌に、

「賤の女がかきつき麥をほしかねて夕まどひするこかの里人

秋

から井戸は西瓜に逢す月のみか

大和めぐりして

秋もはや宇田の炭がま煙けり

須磨の月は行に十三里、名月を待に廿日あまりといふを聞す、あらじやうこはの法師や。

出ていなば影法師もな須磨の月

休斗宅にて

うづら鳴田も見えたりな鼠丸堂

鑿棚や蚊は血ぶくれて飛あるく

光枝氏備後國福山へ、出陣の御供せられしを祝して

しこ草の鬼もしかるゝ陣屋哉

劍術執行する人に

蟷螂の鎌を立るも力味とや

蘭舟亭にて別傳和尚相見の時所望

佛にも是には馴るゝ糸瓜かな

多賀谷氏初の九月江府を出て、伊勢へ代參せし物語をことぶきて

きゝに出て又もや菊の舞の袖

利陽童子に別れし年、八月十

五夜に

「此秋は膝に子のない月見かな

筆とらぬ人もあらふ敷けふの月

をみなへし猿にもなるゝ山路かな

月次の發句乞れて・

寄そめて菊をいくへも重ふぞ

盧陽

心から栗に味ある節句かな

七夕

田の水の湯と成て星の逢夜哉

九月十三夜、明星待て病後のとぶきをいへる。

後の月入て顔よし星の空

今津に住ける野田某の翁が許に行て、万葉集の物語など聞て日をくれてかへるさ、發句して立といひしほどに、彼集の詞をとりて

二里いぬる門に立たつ芽子の月

宮の嗅あきたつ森のかげろふや

惟然が伊丹の我宿に來りていふ句

秋晴たあら鬼つらのゆふべやな

とりあへず

いぜんおじやつた時はまだ夏

佛の兄の鼾扉をたゝかふと思ふとし、あまたたびなり。荆棘出がたに、やう〳〵ことしの秋にこそ其室には入りたれ。

團水

蹤柿の霜にあふこそうれしけれ

身は團栗の味もしや〳〵りも

紫野といふ題を得て

風玉に月の輪きほふむらさき野

九月盡　住吉の神送りに

たれもみな打あふのくや四社の前

奥の海といふ盃に

花に月身をばいづくにおりやしらぬ

いんじ中の秋、老母にはなれける玉祭りに

去年に似たけふならばこそ鯖くはめ

猿猴の繪に

御所柿のさもあか〳〵と木の空に

也雲軒宗旦懐舊

常に思ひ常にむかふ、めぐりて十三のとしになれば

さもこそそも香さへ菊さへいつもさへ

島蹇に

むかふぞや相生のやうに此秋も春に

たが身にもひとつふたつは秋の空

蟬子古郷に歸る餞別に

そちとこちの中に季を持わかれ哉

愛宕火やむれつゝ暮を花ざかり

昆陽池

物いはぬ魚の片目や水の月

誹諧獨吟の千句を思ひ出て、長月のはじめ玉津島に願をかけ奉りて

影たのむ三日の月より滿るまで

七月の郭公といふ題にて

卯の花や踊崩れてほとゝぎす

出雲國風水、東武に行なんとて、京にのぼりけるにあひて

八雲立京に秋たつ富士に立

八月十五夜

身ひとつを最中こえなば素秋哉
重陽

久かたや朝の夜るから空の菊
獨吟懇百韵　千句の内

星も嘸空をどこらに此ゆふべ
そゞろながらになみだ吹風

夢見せた枕ひとつに氣をなれて
下略

越前國大野城主に仕へて、八月廿一日はじめて彼地に到る。

どふ寐ても慥な秋の寐覺哉
大野より京へ歸る時、敦賀といふ所見まほしくて、九月五日彼地に宿し、夜更るまでゐるじとかたりて

弓張のつるがにはなすやどりかな
路通移徙興行

友とする夜も文車の荻の聲

むかしやら今やらうつゝ秋のくれ
九月廿二日出雲の國の人、風水が死去せしよしを聞て

秋とつれて神に出るかず身はいづこ

芋もやゝみの入るほどぞ三日の月
八月十日淡水、月次の誹諧興行に

あぶれ蚊のほめかぬ壁を便りかな
心を文車の文にのせて、やさしき數に入ける女のもとにて

秋風や窓にまくらに須磨の卷
鷄賀宅にて

よひやみに火袋深き木の間かな
九月朔日人の妻もとめたるに

菊にきく垣なき中のむすびかな
文月七日の憂りを

霹とりに起て目をするくもりかな
八月十五夜

月見　心人の脱(モスタ)も木にこよひ
九月十三日の月を

身は闇にうづもれし後を此光
立秋

秋立や花の初音のわすれ草

同よろこびを述

秋や今朝たつを眞袖の三ッ柏
七夕

地にあらば薄や星のみだれ髪
中元

鼠尾草のよそも御名よぶゆふべかな
おなじく

魂〳〵とて姿なけれど瓜なすび
九月十二日黒門へ、神事にまねかれて

神の日と來てさへまねく尾花哉
十五夜　七句こゝに並べ書つく。

去年のあすの心にくもる月見かな

めづらしと我影さへや窓の月

明なばの面影こゝら窓の月

愚痴〳〵とひとりに更る月見かは

影法師にこゝろを分る月見かな

からやうや月のその空水の月

只の夜の夢のまくらや月の晝
菅家御歌に

「ながめずば夢の枕に過ぬべし
月のきかする時鳥かな

人の妻の身まかりけるときゝておくる。

こぼるゝにつけてわりなし萩の露

雞賀東武發句俄別

雜

駒引の心にかなふ旅出かな

金毛日待に菊を立添て、發句せよと望し時

幾露と朝待菊の笑顔山

千及がいつくしみ深かりける千白といひし門弟子、長月の末身まかりけるを悼て送る。

燈火をさぞながき夜の力草

中元　二句

わすれめや世にありのみの魂むかへ

靈に玉消ぬほとけに萩の露

九月八日江戸に下りける時、はつかあまりやとせむかしの秋をかさねて、ことし又裾野にむかふ。

その秋のおぼえはなかば富士の空

行秋やむかしをかくて富士ひとり

箱根山にて古郷を思ひ

ふるさとをまねくか尾花二子山

江戸より京にかへりて

秋立や富士をうしろに旅歸り

鯉水といふ人、京に在て我許にたづねよりて誹諧の物語などしけるに、やがて伊豫國に歸りなんといへるほどに書て送りける。

秋かぜを我物顔や旅ぶくろ

題老菜子

世には來て親にそむくを馬鹿踊

長月の末齋藤某が母の身まかりしを悔て

まねくとは有が上こそ薄散る

初秋

初秋や耳かきけづる朝ぼらけ

百丸、因幡堂のほとりに閑居をうつす。むかふに人家もなく、常磐木日を覆てみどり也。

秋は先此宿ゆふべ朝ぼらけ

久しく逢ざる人の、京にのぼりけるが、ちかき内に江戸へかへりなんと聞えし名殘りに

行馬の跡に花なし菊の空

よろこべる事ありとて、何がしの許へはじめてまねかれける時、發句こはれて

千代ませと菊もまひたるすがた哉

五十賀

又五つ走ても光れ星の秋

三宅吟東十三回忌に

袖に玉七ッのむつの鐘に露

七夕

七草や露のさかりを星の花

十六夜

一輪やかけのたれ尾の山かづら

鳴門集といふ書を文十撰し、卷頭兩吟の歌仙あり。

鹿の音や渦にまひこむ浪風

佐川氏へ行ける時、兩吟所望、秋季にて吉野の句をとありしに即時

よし野氣のはなれて白し秋の雲

葉鷄頭に蟷螂をかきたる繪に

柴の戸や入日をぬすむ秋の風

十三夜

春はよし野秋の花とも奥の月

玉井氏松堂、身のさちありて旅立けるに、馬のはなむけに一句をつかうまつる。行先も人これをかざずといふ國にて侍る。

笠にせよ千といふ字を旅の秋

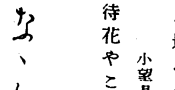
秋月明白ニ侍。詠歌の御心持無御座ゆや、池の汀に參會仕度ゆ。

右は松島雲居和尚の手跡にて持けるを、閑立和尚にまゐらせける時、發句して書付よとありけるに

月影や雲居は消す鳥の跡

小望月の雨を

待花やこよひ雨月の馬さくり



かけはしに猿の折たる氷柱かな

臘月廿日あまり和州こぼり山に行とて

鎌とぐや伊駒あたりのとしの暮

多賀谷氏江府に歸る餞別

餅歌や君が歳暮の馬下りに

初雪

雪に〳〵にけんによもなふて戸を明た

恵心僧都の作とや、烏丸光廣卿の讃有ける小野の小町の木像を、今大路兵部大輔光成のもとより乞來て、元祿十一戊寅臘月十七日誹諧興行

花の色はからびはてたる冬木立

おなじ月廿三日芝柏亭にて、さる事ありて

冬梅の身にあまりたる匂ひかな

をとゝしのから鮭買ふてやすいものまつ宵の頭巾や耳を明て居る

ひう〳〵と風は空行冬牡丹

旅泊

つめたさに火を吹おこす大火入

ある〻物と知ればたふとし神送り

臘月十二日伊駒某宅へはじめて行所望

春ちかうわらひ初たかわすられよ歟

なんと菊のかなぐられうぞ枯てだに

餅つく日家の子手をやぶりて、うすへ血をおとしけるに

かち杵に血を見る餅のつよさ哉

歳暮

としぞけふ朝日や後にくる〻らん

十一月十日鷄賀初て興行

羽二重の御用、新に仰蒙ける

を祝して

羽二重に降やら松に竹に霜

十二月二日鶏賀、東武へ下りける餞別

春待に花の咲身やひがしむき

おなじ月十二日不及宅にまねかれし時所望

何ふるとさだめぬ冬ぞたのもしき

年のくれ　時十三旬

行としのそらの際さへいそがしき

節季ゆや年の岸なるわすれ草

年をまとふいのちや暮の花かつら

明日ありと闇にふすらんとしの山

としの夜もあかしがたやら須磨心

年の淀春さへひとよ伏見まで

としの瀬や都の世話も角田川

人まろの雲へもちかし年の奥

年の塵神の手業に千代や籾

花もみちひとつによせつとし車

年木めせ奥のおく山馬の聲

行としや市に轢らふ炭翁

山を出て何を聾に飾賣

元祿十五年霜月十五日貞徳翁五十年忌に廻文

なきを霜死なば名はなし若翁

壬白に承りゆへば益氣湯參ゆよし、此頃本草綱目に身を入ゆ、人は日用が大事にてゆまま、又肉食も可レ被レ成哉と書付ゆゑと。

霜月十三日

春ならばたんとこしめせ鮒鱠

無名庵にては人の口もいかゞにゆへく、外へ御出ゆ而御求あるべくゆと、鷺助も申傳申ゆ。以上。

惟然坊　おにつら

麥蒔や妹が湯を待頬かぶり

鶏賀亭夢想開の誹諧みちて發句所望の時、錢を吹願ある家なれば祝して

駒引の跡猶はやし梅の陰

翠柏興行

花を雪に見たる法師や雪の花

十二月十二日の夜、各遊興の地に行ける時所望

重ね着に寒さもしらぬ姿かな

冬のにほひをたきとめるむめ　才麿

物音の裏門もはやしづまりて

同じく十九日、鬼次にをだまきといふ誹諧の書をやりし時、發句して奥に書付くれよかしと望しほどに

うぐひすや五文字ほどく年の内

十月十三日、伊豫國漢鳥、京に登りて興行

夕陽のさすがに寒し小六月

鳴海の人千鳥の題にてほ句所望

汲汐や千鳥のこして歸る海士

鶏賀宅にて

ともしびの言葉を咲す寒さかな

備前岡山、山知といふ人に、

はいかいのちなみむすびし時

世の格に居らで冬咲ふかみ草

身にわづらひある人の養生すとて京に登りけるが、やをらこゝろよくて國元の春をむかへ、又春夏の頃來りなんと出立ける、馬のはなむけに

來るとしの身もたのもしや枇杷の花

一馬興行

うつくしく交る中や冬椿

何がしが許へ行けるに、太神宮の御祓を備へ、御酒などよろこばしく見えける程に、折ふし筒に入たる花のいろ〳〵とり添て、ことぶきの數にまうけぬ。

天照や梅に椿に冬日和

某が母身まかりけるを、いたみていひやる句

うかりつゝ日頃の桶の水かゞみ

江戸に在ける時、安藤何がしどのゝ館にて

雪霜に程こそ見ゆれ心花

旅泊

寐覺うき身を旅猿の冬木かな

よし原にて

寒からぬ姿夜なき城の花車

江原和鳳の新宅に招かれ待りて、布袋の繪にことぶきを添て、逃送り侍る。

春待や幸ある家の花ぶくろ

旅宿の寐覺に古郷を思ひて

夜あらしや時雨の底の旅まくら

題大黒天

叶へばぞ陽(やう)につぼめる霜の花

鷄賀宅にて廿六夜待を

うちうるふともしびや冬の心花

素山宅にて挨拶

はや陽(やう)のめぐみて冬の笑ひかな

題王褒

名の消ぬその魂や厚ごほり

題閑子墓

三つがひとつこゝろ香し霜の花

年内立春　二句

去年に似てどこやら霞む年の内

年を産む松も地の角洞の鹿

葉屋何がしにまねかれて

あらたのし冬たつ窓の釜の音

十月廿四日大森道勇に廿年を經て逢けるに、色〳〵物語ありけるうち、夢中の郭公といふ題にて

「一廓は猶手まくらに殘るかと夢もさめあへぬ山ほとゝぎすといふよみ歌を、かたりけるほどに

冬ながら人のはつねやほとゝぎす

都を去て大坂に居をうつしける砌

つめたいにつけても思ふ京の山

前車といふ釜に發句望ければ

口切やこゝろくるまに前車

肥前國基部荒穂宮奉納卷軸

神松や稲もあら穂の冬日和

うれしきもの、春の曙と夏のゆふぐれ。たのしきもの、秋立朝と、一とせの算行空と。

おもかげやとしの鏡もわすれ草

かたち富士に似たる石あり。愛する人の發句せよとしひて聞えしほどに、ひくかりしものを作りておくりぬ。

いつ涌ていつ降雪の玉がしは

水仙にちどりを書たる繪に

夜を殘す風猶さむしひとつ窓

塩屋何がし宅にて、諸士參會の時挨拶に

春に似て心うるはし冬日和

備陽の何がし年月難波の地に有て、風雅のまじはりをなしけるに、ことしかしこき仰事ありて古郷に赴なんとて、一句のかをりを菊畑に殘されし程に、予も亦わざこと歌を作りて、馬のはなむけするのみ。

窓ひらけ幸ありのみのかへり花

山家初雪

初雪や柴に咲せて山ざくら

稲荷奉納

降からに天女の化粧松の琴

須磨にて

笹醪や浦風寒ししほ衣

「さゝぼろや浪こゝもとを打過てすまでのむこそにごり酒なれ

平敦盛

宗月庵に寒しをりから、此道の達人に逢見しに

月に出て德拾ふたり一しぐれ　民麿

置事淺し霜の初花　鬼貫

としの暮

老も花と流るゝとしのますかゞみ

此句前に出すべきを一本に見えざる故、校合の後こゝにのす。

七車卷之五

序跋類

高すなご集序

誹諧の大道は言習ふにも得ず。句のかたち作りならふにも得ず。只我平生の氣、心高天原に遊んで、雪月花の誠なるに戯れ、神妙をしらば、目にみえぬ夢の浮橋、足さはらずして踏に心よき地平〳〵たらん。その花に鳴うぐひす、其水に住かはづ、いづれの歌袋も、すべて天地の袋なり。それが中に、羅門外(回)月尋は、難波の流に、高すなごの轉をなして、一集の名とす。いふこゝろは、盡ぬ道に算へたるの砂子か。あゆみくるしきとよめるのすなごか。さてはかたよらぬすなごなるよな。そのかたよらぬこそ大道なれと

いつて、元祿五年季夏の日、堀川の馬樂堂書ぬ。

佛の兄序

元祿よつのとし、鬼貫の名を馬樂堂にかはり、ことしまた佛兄になりて、誹諧の自序していふ。そも〳〵此書の名となせし心は、古歌によめる佛の兄にはあらず。是なんのあにぞや。しれる人は弟にあらず。夫道ひろき誹諧、みちせばき誹諧、千筋あり一筋あり、束ねて大道あり、内あり外あり、内外なし。あらむづかしの言葉やな、わすれて年をへし物を。

元祿十一戊寅歳仲冬日

實花集序

いんじ誹諧を古しとすれど、十德をはづさず。今を新しといへど、羽織だにもかさねじとす。道はます〳〵はびこれりといへども、道はいよ〳〵枯に似たり。こゝに八雲たつ國の人丸山子、とし彌生の中頃、九重の東山に席をまうけて、百韵興行の日、そのかたちたゞしく、禮を上にかさね、儀を下に着す。かの御抄に、公任經信の兩卿もしらざるとか聞えしを、此人は知にやあらん。實花集と題號して、予に序せよといふ。恐れしけれど筆をとるはや。

元祿十六癸未の年花老下弦

何の姿序

細くからびゝ、ふとくたくましく。うつりゆく時〳〵、おの〳〵はいかいに戯れ、それが心を感じ、これが言葉をむつまじとして、ならべたる數にはなりぬ。されど月の隈なきにたらず、花のにほやかなるにとゞかず。たけ高からず心淺ければ、その姿なんかのすがたには似ぬものならし。これはそも何のすがたぞといふより、此書の名にまうけて、たから永き七かさねのとし。春むつみ月のすゑ。連る中の求に應じて　鬼貫書ぬ。

老の寐覺序　百丸所望

誹諧は天のうずめの命の岩戸の戯より、中頃古今集の、もろこしの吉野、うぐひすのひとくのたぐひなかく世に傳り、守武・宗鑑其したゝりを汲しより、貞德あり、立圃あり、重賴あり。百丸や、その松江の雫をなめて、花鳥に心をうつし、月雪に笠をたづさへ、此道に耽る事久し。今はた其いひすてたる句をひろひて、六六に番ひ、みづから評を付て、予にはし書せよといへども、一鳥の落字なければ、過策をもて補ふ言葉もなし。おもふに丸はたゞ老の寐覺のよく富る者なるべし。しかのみならず、心また其折毎のむかしにかへりて更に黑髮を撫なん事、是誹中の仙ならんやといふ。

享保元ひのえ　申のとし　櫻月中旬

誹諧童子敎序

順ー水丈ー人撰ニ誹ー諧童ー子ー教ー請ニ予序ニ因賦二一章一

・安ー然童ー子ー教　順ー水童ー子ー教
其ー説良有レ以　善ー哉童ー子ー教

わらべ達皮は味ないぞ眞桑瓜

大語物狂序　井發句跋

予内ー寅季ニ夏始赴ニ東ー武一。辭ニ友ー人鸞ー勤ニ于其ー郷一。送且謂曰吾之所レ欲レ見者、惟富ー士ー山耳。雖ニ數ー聞ニ諸往ー來之客一、言レ大而已、景象靡レ詳。請子記ー來及ニ於我ー乎。□月歸ニ于雛ー波一。遂至ニ其塚ー上一、愴ー然而嘆曰難矣生也、將與レ誰語レ之。但雖ニ其人無ニ言猶在レ耳我豈欺ニ於死ー哉、滌ニ翰荻ー露ニ效ニ於繫ニ劍云。

羅ゝ哩居士鬼貫

(『月時』の前に數行の脱文あらん。校訂者)

「富士の形は、畫るにいさゝかかはる事なし。されども腰に帶たる雲の、今見しにはやかはり、そのけしきもまた〳〵おなじからずして、新なる不二をみる事、其數暫時にいくばくぞや。あし高山はおのれ獨り立なば、ならびなからん。外山の國に名あるはあれど、古今景色のかはらぬこそあれ。

「によつぽりと秋の空なる不盡の山

夕ぐれにまた

「馬はゆけど今朝の不二みる秋路哉

峯は八葉にひらきて、不生不滅の雪を頂き、吹ぬ嵐の松の聲、裾野になかぬむしの音、鸞動〳〵、是今たしかに聞ケ、我レ石を撫て生れぬ先の父ごひしき。

此手向草は、よとせむかしの秋にしほれぬ。それが中に、鸞が末期に詠メし松は、天地に久し、我レその木のもとに獨句を次で、ことし又不消の露をむかふ。

百韻

根は常磐しばし紅葉ぬ松のつた
きのふもけふも露は白けれ　鬼貫
あの鴈の來るやよひはかへるらん

下略

和歌の道は我朝の法也。法は常也。その常をしらば誹諧をしるべし。誹諧の夢覺なばまた常をしらん。なれど、我いまだ此道の達人を見ず。世上皆風躰にかゝはり、或は□句を工みにし、言葉をかざりて、前句のなじみをもわきまへず。或は懐紙座所、又は正花をあらそひ、我を立る輩是おのれに德なき故也。德あれば人、夫を惡敷におかず。若我を以て德を押時は、其我にゆづりて、作る所の句の中に、卷頭あるの意味をしらず。只誹諧の味を喰ひ、今日のたすかる事をえずして、得る所、皆病ひのみなり。曰ク人と我と常いふ所の言葉、十七十四にきれば、ことごとく誹諧也。其世界をしらば、全體前句のなじみあるべし。發句も亦目前の常を作らば意味深うして、しかも匂ひあらん。その大道にいたらずして、かたちを似せば、一句になどか色香を持ん。善惡を知

て、姿風躰のよき所にとどまるも、是病ひなれば、只可不可のふたつをもわするべし。わするゝといふも亦おなじ病ひ也。

ひとり立我誹諧を覩ずれば
上手でもなし下手にてもなし

元祿三庚午五月　日

萩の百よせの序

高津の月は、芦角が萩にかたぶき、大寺のかねは曉の露につたふて感情日閑也。閑の夜の覺束なさは、よきあたりに燈籠置て、其風情あり。夜の露の日に打かはきたる、うるほへる花にはなくてあはれ深し。又雨にうたれ風に吹れて、おのれどち亂合たるは、するどにはあらず。明暮此風情に富る事、秋はたゞ蘆角が家に有べし。見及び聞傳へて、誰それの送れる句、とり揃て、萩の百よせといふ名にして、書をなせる日、序を乞に默止がたくて書ぬ。

萩を分てもゝをぞかたくわするゝな

時は逢がたくて失ひやすし。こゝに來山といひし人、誹道に其名高く、世もて其風をしたはずといふ事なし。予若かりし頃よりしたしく相かたらひ侍りける。昔螢雪の窓をたゝいて、鶯にはあらねど、小鍋やほしきと手づから惠み來りし、其名を小西と呼ていまぞかり。鍋の命はつきなかりしを、去年の時雨月の初、定なき數に入ぬ。其頃句に悼てつかうまつりし、我袖のきはづきもかはかざるに、はや一めぐりのけふにむかふ。

むかしおもふしぐれ降夜の鍋の音

生前の風流は、木の葉駒にくはしくのすれば、更にもいはじ。彼翁天性酒を愛すといへども、終に親疎青白の眼をわかたず。しば〳〵沈醉の中にも、誹諧を諷ふ事、おそらくは一斗百篇の詩を班ずといふべし。世の人十萬堂と稱美せり。其美をしたひ、其德をあふぐ、食客門人、筆をして盡しがたし。それが中に鳥路齋文十、ひとり節を守り、志の高き事、彼陣后山も麓なるべし。よて遠千鳥を編して、いさゝか師恩を酬んとす。これが序を乞にいなみがたく、享保かのとの酉、初冬の日、槿花翁おにつら筆をとるものならし。

遠千鳥序

伊丹發句合跋

伊丹の發句合といふ物を、月尋が懷より出して、予に跋を乞。見ればかの里の好士等の句に對して、獨四七（板本「つゝ」とあり、今『伊丹發句合』によりて訂正す）の句を番ひたるなり。其姿は面のどくにして、各一樣ならず。天性の得たるをもて、おのづからの風情となるに似たるなるべし。才麿が評は、幕をもて花を粧ひ、舟をうかべて月の見所を求がごし。難波

津や梅の翁のにほひたえず、柿園の翁のしづくかはかずして、實靑からず、澁からぬもの、これ此月尋ならんかし。

正德甲午年

郭公の卷の跋

支考ほとゝぎすの盃に醉て、西に行ば、座神うのはなの匂ひををしむ。是を束ねて序は素堂がすみにすゝめの墨ぐろに書ぬ。

くわい〳〵と夏の蛙の鳴すもと

寶永二乙酉の夏日洛の永昌陽(坊)　鬼貫書

荒小田跋　舍羅撰

あら小田といふ書を作りて、言葉の種をまけば、花あり實あり。桃々坊（板本墨消してあり、今『荒小田』によりて補ふ）是はいかいの鳥追。

うね〳〵と船に筋蹤ふ鴨の聲　佛兄

古園誹格跋

泉宇盤只（谷カ）ことし仲夏の頃、富士を右にし、頭を誹諧に傾、足を訪尋の車にして、なす所此古園誹格。是を抱きて、初冬又富士を左にして去。

元祿十五壬午初冬　犬居士　鬼貫

贈辭記讃類

南都松井和泉へおくる詞

墨は聖賢の敎をとこしなへに傳へ、あるは千里の外に人の心を通はし、あるは四季をり〳〵の詞の花の中立ともなれりける。何がし松井氏、その功を貴み、その德を感じ、今製家のおろそかに成ける事を歎きて、遠く橘の京の昔の匂ひをおこし、紀貫之の梅のかをりをしたひて、普く詩歌連誹の句を乞もとめものしける。それが中に予は伊勢の御の梅の詠歌の句をとりていふのみ。

花と見てをられぬ水に石の雲

閑立和尙におくる詞、

難波津や、天みつ北のかたほとり、砂原といふ所に、西方便と聞えし隱逸の行者あり。柴の扉をとぢて、甘露王につかへ、庭わづかなるに、こと草を養ひ置て、をり〳〵ごとの花をさゝげ、明暮御名をこがるゝ聲の、いとたふとかりければ、垣のそともをゆきかふ人、袖に露おかずといふ事なし。すべて此世に生るゝ輩、死る例をしり顏なるも、みなしらぬにやあらん。必死る例ある事をひじりにとふてしれ。

まけよ蒔ヶ佛の種も彼岸から

靑松居をことぶく詞

九重や杜鵑の名だゝるは、初音まつ空よりも高く、かへる浪なきといひし磯邊の木陰によりては、かへらん事ををしみ、立わかれいなばの山には、今かへりこんとの契りを殘し、都のつとにいさと思し

あねはのすがたは、人ならぬ事をうらみ、曾根高砂のめでたきためしも、住の江の岸におもひよせ、そのことぶきをまた何がしが庭にうつしこしらへて、千代ふべき事をまねくものならし。

青陽の空に鶴さへ(き)く花の床

大口理右衛門、去年霜降月のはじめ、白生の鷺ふた羽を二夜つゞけて夢に見しとなん。

ことしの秋よろしき　公役の仰蒙りて、家の格式人に越たりけるをことぶきておくることば

大口氏何がし、よゝ難波津に富て、仲尼のほめし所にしたがへば、求ずして万幸おのづからきそひぬ。いんじは、白かねや霜降月のはじめ、玉爪金眸を夢見し事ひと夜ならずとかや。ことし寐覚月の中頃、所の循吏かしこき仰ごとありて、又あらたにさきくをかさね揚る事鷹の如し。おほけなけれど、師尚父になぞらへて、陰徳のいさほしならずや。ことぶきいはんとて、寶永つちのえ子、猶千代よばふ菊月の末、筆を取てかいつけて見す。

夢の色のこがね粧ふ日の出かな

一桃子におくる詞

東武一桃と聞えし人は、はるかなる唐土舟の流よる長崎の府生也けらし。一とせなには津の梅のにほひをしたひ、一帆の風に身をまかせて、あまみつや老松の名をもたる所に住とゞまりて、富る人、落葉かく人、あまねく長生の救ひをしたひぬれば、不老を願人すら門前に市をなさずといふ事なし。予もしばらく軒をならべる友となるより、筆をして物いはせよかしと、戯にたはぶれ待りて、一句をたはぶるゝものなり。

朝風や菊のうなづく菊の露

岡田休意におくる詞

うぐひすの聲めづらしき朝より、ゆふべゆふべかねの音さへ重り、犬吠るあたりを桃盛なる里なるらんといそがれ、とかくして春をしき空も、卯の花月夜に心移りて、さくらの花の俤をわすれ、菖蒲ふく軒端も、きのふになりて、風のおとづるゝ窓によるこそわりなけれ。秋たつ朝は、星をいたゞきて枕にそむき、やさしき數にも入なんやと、露とるかた手に、硯なんどを洗ひ、それも又跡にながして、くだ物よろこぶ人の心こそ薩からぬ。三五夜の空もひと日ノ〜指のかずさへをりつくし、其夜になりては、又最中過なん明日の心をおもひおかれ、菊の花日さすあしたは、きぬの綿さへ身になじみて、火桶かゝゆる老の寐覚は、窓に雲行そらをうちながめて、年くるゝこそたのしけれ。

、

珠數くりて春を待こそ仕事なれ

文臺記　句選に出たれば略す。（句選卷之三にあり）

六玉川讃

百丸は、一軸の玉川を弄んで、眼をそゝぎ心を洗て、是をたのしみとして、六國の景色身をはなたず。其ちからやつよからん、懐や廣からん。予もひとゝせかの川をわたりて、たのしき事を得たれば、それを投出しぬ。

是こゝへ蛙の飛んだ足の甲

次の川は、在所分明ならず。畫圖は丸子が屋におなじ。

玉川を雪かと見れば四月哉

はるかに百餘里はへだゝれど、川は卯の花の隣にながれて、調布はとこしなへに臼を帶たり。

川風や夏の日落る臼の音

非情は時を得て花をむすび、月は常住の水にやどる。

むらさきも白もおなじ萩の枝に
いづれを分て月やどるらむ

汐風枯芦に吹わたりて、友すれの音、かろ〳〵とみゝにさはり、目にさへ寒ういろどりたれば、心既に共國の境界にならふ。

いざゝらば醉醢灑のふで千鳥きこ
わすれては汲やしつらんとありしを、皆人毒水などいへどさはあらぬとか聞し。

谷水や風にたゞよふ月の糞

元祿十三庚辰臘月日　佛兄書

犬居士

句選に載る所省略せり。故に全篇をこゝにうつす。

八月卅日、大坂の市を立て、山居をはなれ、里家の閑なるを好んで、福島に心を動し。みづから犬居士と呼て、誹道をほゆ。尾もなし又頭もなし。家は汐津橋といふはしのほとり也。前には軒の松風流水に浸して猶ひやゝかに、後には野徑のむし時しも野分に吹おくりて、おのれおのれが聲かすかなり。今は閻なれどやがて月の爲にはとたのしくおぼえて、

「閻がりの松の木さへも秋の月

明れば長月朔日。家せばくて多からぬ道具さへ置所なく、そこ〳〵に棚などつらせて、ひるの頃まではいそがはし。やう〳〵ほこり掃捨て安坐す。

吹風や稲の香包ふ具足櫃

右には武庫、淡路のつゞき遠く聳へ、左は伊駒かつらきの峯はるかに高し。來れる人もなければ、物埋む雲もなく、うちはれて致景ことぐくあざやかなり。

わせるなら霧のないまに誰もがな

むかふ堂島の新地、家立ならび、船きほふ堀江の川風に、西海の浪をわすれ、入日ををしむ。歸帆半は屋上に見こし、姿しらぬ旅人のわかれをおもふだに、此夕はさらにもかなし。

須磨の秋の風のしみたる帆莚歟

三日飄海のおとづれに六句の吟。

出て聞はおぬしがいひし秋の風　由平

月も持ったりこちの松の木　鬼貫

跡句略之。

五日十万堂にとはれて雨吟してつれ〴〵を送る。

秋風や男世帯に鳴千鳥　來山

月のあかりに船たでる濱　鬼貫

右歌仙有、跡句略之。

七日盤水みゆ。つれ立出てほとりの野徑に遊ぶ。

秋の風吹わたりけり人の顏

盤水發句略之。

向重陽

けふは家〻に鍬を休て、牛馬の息までも靜なり。めのをのこの姿は木綿なれど、綿いれたるころもの時しり顏に、藍までは染ねどやさし。

機しねを網にしたりや栗袋

後名月

けふは梢の松風もくれぬさきより、東山の峯をまねきて、實非情さへとみゆ。猶頃さりて十五夜の雨も、今宵の空に晴て月明〻たり。

跡の月雨の降時けふの月

十五日家見にとて兩友を得たり。夜までかたりて三吟滿て歸る。

歌仙　虛風發句、鬼貫脇、文十第三。

誹諧略之。

『句選』卷の五「禁足旅記」一篇はこの次につゞくもの也。別に『犬居士』と云へるものありて、こゝに略せる連句は悉く掲記せり。校訂者記す。

北條國水が許より愚者といふ題をこして發句をけるほどに

道に慥なる人は、しらぬをしらざるとす。慥ならざるは。しらず顏なるをよしとす。此故に下手なうして、しかも下手多し。達人の誹諧は、みづから述てみづから心をよろこばしむ。彼知り顏の人は、みづから述て人におよぼし、よしといへば悅び、惡しといへばくるしむ。是己がくらければなり。其くらき事を、己はよくしりて人に隱す。達人は是をみれどもあらはれず、あらはさねばしらざると思ふのたぐひ多し。それ變化をしりて人に先ンずる有。盲者これをにくむ。たとへば剛强のものにつれ立て、柔弱のもの〻道を歩に腹を立るにひとし。抑貞德立圃重頼三老の風姿、世に流布するの後、梅翁出て是を變化す。其時古風をはなれざるの輩、嘲哢して放狂の體といへるを、ふるしと言てわらふ人すら、今の變化をにくむは、其ふるしとさしたる輩のたぐひに、覺えずして今己が心のなりたる事をしれ。

「來いといふ時にはこいでおういおい

大元式卷頭

物狂といふものぐるひに興なきはなし。我大悟物狂は其興なき初諸人笑ッてとら

す。是珍愛(重カ)。又いやしめざるは柳水ひとり、是迷惑。あらおそろしの此人やな。

寒空に都を逃し物ぐるひ

哀傷類

亡子を悼し詞

元祿八亥のとしのむ月の六日の夜、母の夢想に、南面に松はへにけり、といふ句を見て、其年の亥の月の、中の亥の日、卯の上刻に誕生す。名を永太郎と呼んで、月を送り日を重るにしたがひて、聰明人にこえ、平生もてあそぶわざは、武氣自然に備り、生得强勢なりしを、今年初陽の上の五日より、疱瘡のためにおかされ、醫療應ぜずして、中の五日の戌の下刻に終りぬ。抑かゝる凶事のあるべきにや、南面の松ゆゑなきに枯、西裏の松は風やはらかなるに、大枝をれぬ。其外あまたの前表をあらはし來れば、ひとへに天數のまぬがれざる所か。されど愛念しばらくも離がたくて、老少不定の明理、たちまちに曇らんとし、夜の雨は窓をくゞつて胸を叩き、松吹風はいつも聞音にはあらず。とかくして、一七日の夕、骸を納たる寺に行て

土に埋て子の咲花もある事か

日は西山に入て、明朝東山に出。庭の梅の花今年又花生ず。一切是空年の夢。昨日永太郎、今日利陽童子。

木をわりて見たれば中に花もなし
されども木より花はさきぬる

元祿十三庚辰孟春廿一日　父佛兄手向

塩屋何がしが死去を悼て贈る詞

花のあした月のゆふべ、友とせし人の、窓に彳む面影も、いつしか野邊の煙と立のぼりて、その事かの事、夢になりはつるうつゝ心こそかなしけれ。

山吹にさきだつ雨や身のひとつ

百丸追悼

西行は花の下にて我死んとよみて、其きさらぎの中の五日に、ながく世をねぶれるとかや。百翁は上人に一日遲し。歌人誹人ともに、かのきしにいたりて、蓮を同じうせん事をこそ思ひやり侍れ。

落日や釋迦もうしろに入さ山

百丸が妾の身まかりしを聞ておくる悼の詞

此佛、百丸と現のかたらひしける頃より、むつましく、花にほひ月さやかなる時ゝ、九夏の風、玄冬のふすまにも我軒端をとひ彼家に行て、心おかぬ程にありけるを、我やことしの春、さる事ありて京に住離ぬ。彌生の中頃、故郷にくだりてまみえまつるに、はやあす歸りなん、持病御快、やがて都へなんどいさめ侍れば、うちな

みだぐみて、いらへもなきほどに見えつる、今のおどろきに思ひ合てあはれにたへがたうこそ侍れ。

春の夜の面さしもなし夏の月

蟻道一周忌に手向る詞

蟻道や維舟の門人にて、我誹諧の弟なり。天性風をいとひ花をおもひ、雲をあやしみて月を愛しつゝ、市中に在て清閑の扉をしむ。かの鶏頭や、鉢叩や、是をいはずば蟻道も蟻道にはあらじ。いひ得て卽蟻道也。その初音や、雪の曙や、心と詞と能相叶て、都鄙遠境の耳をめぐり、貴賤頭を春きて、其感こまやかに味ふ事、舌頭に箕形の業をなさしむ。かくて見もしらぬ人すら、霞をあはれみ、露をかなしむ心を養育するの粮とし、其序ををしへずして、いくばくの人に伴ふ。それいづれの上ゝをのぞき、又其下ゝにをらん事かたかるべし。

から鮭は誰が娘ともしれぬなり

此句は予が持し小町の木像のからびたるにむかへるうるはしさ也。若轍の魚の呼事あらば、蟻道又いづれの水をかあたへん。此人や深く風雅の境をこえ、遠く月花の迹をわきまへ、いつしか妄想能斷して、無着空心の佛性をも見得したるなるべし。嗟蟻道、去年の橘月、むかしの人の數に入ぬ。ことしそのけふにむかふ朝、あすしらぬ身ながら一枝を手向るのみ。

夏草の秋まつ程ぞ甘露王　鬼貫

儀屋宗旦七回忌きいたむ詞

甑箪の鯰いんでいづくにかある。なしといはむとすれば、水は流てちん〳〵、風は吹て颯ゝ。

死や生や七ッになりし石佛

宗旦末期に「世の中はたゞ甑箪の大鯰おきへ〳〵てにげていにけり。」といへるを思ひて書たる詞也。

池西言水が一周忌に發句を手向よと方設が許よりをけるほど送りける詞書をよむ

其名ばかりをとゞめ置て、枯野の滿に俤を見し古人の魂を動せしはむかし也。池西言水誹諧に業をたてゝ、世の中に副ふ。あかれぬ人の數にて、維舟の流を汲ながら、しかも其舟にもつながれず。筆の道學すして、佐理道風が假名の手もとを覺えぬ。人よくまじはりをむすぶ。七十の年の後、埋れる苔の上をしたひて、今やわすれぬ志にあそび、此いさほしに寄人は、なにがし方設也。是もすける心さしおとらず。誰かれ月花のかたらひ多して、窓軒端をたのしとす。我も爻の莚に曲を覺えし友なれば、をかしさあはれさ心のはしながう、なきあとの石の面こそせんなけれ。

朽もせぬ石に袖なし花すゝき

慶志を悼て鶏賀へ送る言葉

慶志はとし頃はいかいに心をゆだねて、

能友に交、能人したしめる事、たとへば花に、朝のあらしをいとひ、月のゆふべのうき雲を思ふどくにこそ有けれ。されど彼四っの品まぬがれぬ世のならひなれば、いつのころよりか身にいたづきのいるにまかせて、吉野初瀬の春秋も人のながめとはなりぬめれど、ゐながら心をよろこばしむるこそ、去此不遠の理りにも叶ぬべしや。されば飛花落葉のさかひあり、有爲轉變のならひまで、常によくわきまへたるにや。霜の二日の朝風に、正念にして念佛とともに行けるこそ有がたけれ。

散とのみ見る目や婆婆の冬木立

來山追悼

花にとはれ月に音信しも、むかしの數に入て、其事かのとに、幾十とせの夢をかぞへ、我袖のきはづきも、戀しき今の形見とはなりぬ。

文も見ぬしぐれふる夜ぞ定なき

補遺

前贈辭の類へ收べきをもらしつ、よてこゝに出せり。

小町の木像を九問にゆづりける副文

小町の名まち〳〵なる中に、明月記現形の神名ひとつにのせて、日の本のわざ事に遊びたのしむ人も、わするゝ事なし。昔惠心院源信の親室に有て、人万呂・赤人・猿丸・黒主・小町にあへりと。それより滿哲沙彌が歌を感ず。其因にや、其作は百とせのかたち殘れり。中頃陽明殿下の御家にて寺田無禪に傳はり、ひさしく秘藏して持り。是ももゝとせあまり十の五の齡をかさね、手かき歌よむ事人よくしれり。さるを今大路兵部大輔光成あつく信仰して、これが家に祭る。其後ふかき故ありて、我物となれるより、花月の魂いますがごくうやまひ、ほとゝぎすに起され、雪にたはぶれしも、皆御影にさそはれけるよと思ひとりしを、門人何がし養雛齋九問、我にわざことの道しるべせよといふより、燈火のもとにありては、昔の人の俤をしたひ、窓によりては、昨日の雲の行方を思ふ。其風流さすがにいやしからねば、此神像のやどす所も我にひとしき事を思ひよりて、烏丸光廣卿の副文、又予が心覺えをかいそへ、享保五庚子のとし、神むかへ月朔日、九問にこれを讓りて、永く其家に輝ませとあふぐのみならし。

木がらしの底に花行老の浪　鬼貫

七　車　終

鬼貫一名佛兄、姓は平泉、假名は與三兵衛、津の國伊丹の人、其先はみちのくなる、和泉三郎忠衡より出たり。表して槿花翁といひ、又囉〻哩、あるは犬居士馬樂堂など稱せり。中頃洛の堀川に寓し、後は浪華に住す。壯年の頃、やまと郡山本多侯につかへられしかど、久しからで、母の病るにあふて、祿を辭し、歸去來を吟ず。七十三のとし髮おろして、法諱を卽翁と號す。元文三年戊午秋葉月二日、島の內うなぎ谷わたりの家に病沒せりとぞ。今世誹諧を事とする人、鬼貫をしらぬあり、しりぬるも亦深く捜りぬるは稀也。これまたく當時此翁はもと伊丹の一豪家にして、點者てふ稱を立ず、はたかの支考野坡などがど、自ら衒ありける類にあらざりし故にや。其小傳を閱するに、鄕を出て後は、浪速に、暫は洛にも居を寓せ、導引をもて年月を送るのよすがとす。其術たるや、もと明人某國の亂をさけて瓊浦に投ぜしを、道古なるもの、親み隨ひ、賾を探りて、其技をうけ授りぬ。翁は卽古が高弟にして、藍より出るの妙あり。天性眞率不羈にして、よろづ物に拘ず、學あり、才秀で、識尤高し。曾て弱かりし時、重賴に學び、宗因を友とし、すでに三十年に及ては、卓然として一家をなし、

同郷の百丸、青人等を携へ、終に伊丹風なるものを興す。其調天に倚地を拔、俗を用て俗を離れ、初は入易きが如くにして、彌見れば彌難し。生涯の佳什、人のしりぬるかぎりは更にも云ず、すべて集中に、あるは解しがたく、あるは無味なる、あるは嶮なる類などは、初心しばらく手つけずて有なん。束ねていへば、たゞ其氣象の高く逸れたるに、目とゞめぬべくこそ。此道發明の旨は、獨語にみえたり。芭蕉には十六七年もやおくれたりけめど、八ッのころより指を染められしと見ゆれば、稽古の功はけつく先たちてや有けん。よのつねの話にも、さいつころ筆執しめける桃青をのこ、其質さかしとしも覺ざりしが、いつしか諸處にいちじるく振回ありくよなどうちほゝゑみて蔑視せられしよしなれば、まいて其餘の作者は論ずる事をまたず。八十に今ふたつ滿たで、やまふに臥れし時、諸門人枕のもとにさしつどひて句を乞けるにいな吾常〻興にふれ、事に感じてほくをもせしかど、今はた簀を易るに臨て、煩はしう何をかいひ出べきと答られしを、一人おしてさりともおぼす事なからましや、あはれおせあれかしとしひければ、微笑してさらば吾生付て蛇嫌なる事は、そこたちも知てん、な

くなりて野邊送りすべかめる時、かの柩おほふなる旗の頭に、青き蛇の、赤き舌出したる、いとこゝちあしからめ、これをふよ用ようにとりはかりたびてよといひつゝ終られぬとぞ。此ノ其節ノ例ニアリシ五ノ馬ナル人八ナチカクニテ存生ノ証さるを今、大坂の書肆高橋生、むかし其祖の翁の徒弟なりし因みをもて、向に梓行せる選に洩たる句〻文章ともについで彫みて、七車のほいをあらはす。此生もとより雅道にたづさはらねども、相識蘆屋して、余が跋を請ふ。屋も亦俳歌を嗜むにはあらず、たゞ翁の句を喜ぶが故に、此事を託するならし。よつてこれが爲にあら〳〵聞る所をしるして、索をふさぎ、かつは千載知己の意を淑すといふ。

蘆屋相知レル醫士某、正サシク翁堂引傳授ノ人ニテ、常ニ翁ノ昔ヲ語ル。コノ故ニ、尚洩ヌルコトヲタツネマシトスルニ、折節イタハルコアリテ、止難ク、タヾコノ旨ヲ誌シテ余ニ授ゼリ。

天明三年秋八月上浣

洛　三宅嘯山題

天明三年癸卯初冬

書林

京都二条寺町通　野田治兵衛

江戸本石町十軒店　山崎金兵衛

大阪心斎橋通北久宝寺町　芝木佐兵衛

同　大賀惣兵衛

同　心斎橋通南久太郎町　高橋平助